
アンタイトルド・ライト・パルプ

鱈橋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンタイトルド・ライト・パルプ

【Nコード】

N3335Y

【作者名】

鱈橋

【あらすじ】

取り留めもない習作。

ライトノベルが主な蔵書の読書喫茶。

奥のスタッフルームの扉を開けると、そこにはファンタジー世界が広がっていた。

リアリティ・ライン

無駄話をしよう。

リアリティ・ラインという言葉がある。おもに脚本家の間で使用される言葉だそうだ。

意味としては、作品におけるリアリティの水準のことを指している。

たとえば大きな爆発があつて、人が巻き込まれたとする。

巻き込まれた人間が、すすだらけの姿で立ち尽くし、髪の毛をチリチリに乱し、口から煙を吐きながらも生命には別状がないとする。その場合、作品はおそらくコメディであり、ちよつとやそつとでは人の死なない世界観である。現実とリアリティ・ラインはかなり離れている訳だ。

では爆心地にいた人間の四肢が飛び周囲に内蔵が散らばつていれば、かなり現実味がある世界観となる。リアリティ・ラインは現実に沿った形になる。

リアリティ・ラインはいわば観客の視線を決める座席のようなものだ。安心して作品を楽しむためには安定した椅子が　リアリティ・ラインが必要だ。左右に揺らぎながらでは、まともにスクリーンを見ることはできない。

たとえば主人公がタイムトラベルの能力を持ったSFがあるとする。時間を自分の思い道理にする様が描かれる。しかしその直後に主人公が「学校に遅刻してしまう」と焦り出したらどうだろう。どうかんがえても矛盾が生じてしまう。リアリティ・ラインが不安定になり、見ている側は椅子の揺れに気づき、とたんに現実に引き戻されてしまう。

つまり良質な作品は安定したリアリティ・ラインが必要不可欠なのだ。

ようやく富士野の長々しい講釈がおわった。俺はため息を吐きながら問いかける。

「で、その話と、今のこの状況がどう関係してくるんだよ」

「良い質問だね立原くん。要するに我々の認識していたラインを逸脱している光景だということだよ」富士野はそういつてドアの向こうを指した。

ここは寂れた喫茶店の店内で、扉を開けるとスタッフルームにながっているはずだった。

しかし、ドアの向こうには、いつもの見慣れた光景はない。部屋にこもって本を読みふける店長も、本棚からあふれた書籍もありはしない。それどころか室内ですらなかった。

察するにファンタジーである。雄大な草原の先には巨大な山脈が見える。それだけなら北欧の景色とも見えなくはない。しかし山頂には現実世界としてはありえない生物が鎮座していた。

ドラゴンである。遠目にみてもそれとわかるシルエツトだ。黒々とした翼を休め寝息を立てている。

「とりあえず」富士野はメガネをかけ直し、ドアを閉める。「見なかったことにしよう」

伏線

伏線とは、作り手側の優しさだと思おうわけだ。

冷たい人間はお近づきになりたくないし。これ見よがしにいい人ぶって優しさをひけらかすのも感心しない。

たとえば、なんの前フリもなく実の父親が死神だったなんて藪から棒にいわれてしまうと、受け手としては突き放された感覚になり、コミックス購入を断絶してしまうも無理からぬことだ。

だからといって、何でも思わせぶりに前説を入れる必要はない。ミステリーで容疑者全員が含みのある人物だとやかましくて仕方がない。

「優しさが足りないな。前フリがなさすぎる。起こった事象が突拍子もなさすぎて考察しようがない」富士野はカウンターに入りコーヒーを入れ始めた。

俺は、カウンター席に腰を落ち着けた。

「確かに、平穏な日常に超現実的なことが起きるなんて、期待はしていても予想はしないからな」俺はそういって、スタッフルーム、通称引きこもり部屋に目をやった。

ここはただのコンセプト喫茶店だ。いわばマンガ喫茶の小説版、おちついた雰囲気で文章を読んでもらおうという空間だ。ただしおいてある本は店長の趣味によって八割がたライトノベルとなっている。窓側にも書棚をおいてあるせいで店内は薄暗い。そして奥にあるのが店長の引きこもり部屋。店長用の安楽椅子、店員用の長いすがおいてあり、それ以外のスペースには無数の積み本がおかれている。古本新刊借り物あらゆる本が本棚からあふれだし床に積み上げられている。一部は人の身長をも超していて、依然倒れたときには

店長の捜索隊を編成する騒ぎになった。

そして、いまそのスタッフルームが異界への扉と化していた。

富士野はブラックコーヒーを一啜りして、もったいぶった口調で切り出した。「それで我々はどう行動しようかね立原くん」

「見なかったことにするんじゃないの？」

「そういう分けにもいかないだろう。店長の無事も気になるところだし。あと、コレは些細なことだが今週分の給料をもらっていないのも気がかりだ」

「文字どおり現金な物言いだな」

「人助けはいいことだよね立原くん」富士野はカップを置くと、二杯目を継ぎ足した。

「じゃあ、ドアの中に入るのか」俺は席を離れ、ドアの前に立った。戸惑いながらもノブをひねり、手前に引く。

草原だ。先ほどの景色は夢幻のたぐいではなく現実のようだった。店内に清涼感のある草原の空気が流れ込んだ。俺はゆっくりドアを締める。遠くで得体のしれない生物の鳴き声が聞こえた気がした。

「俺にもコーヒー、もらえるか」

富士野は無言で新しいカップを手にとって、デカンタからコーヒーを注いだ。

「なあ、アレは一体何なんだ」カウンターに座りカップを手にとつてぼんやり中の液体を見つめた。

あまりの現実離れた光景に、取り乱すよりも、呆然としてしまった。脳が処理能力を超えて熱暴走してしまったように妙な浮遊感をこめかみのあたりに感じた。

「とりあえずだ。僕らの常識では計り知れないということだけは、確かだろうね」富士野は達観したような表情をしている。「ここは普通の喫茶店だが、ドアの向こうには、ファンタジーな世界が広がっている。そして恐らく店長は向こう側に居る」立ち上がる富士野、嫌な予感がした。「となると、取るべき行動はひとつだよな」

富士野は強引に俺のうでを掴むとドアの方へと引きずっていった。

「人助けはいいことだよな」

「お前、楽しんでないか」

「男は度胸、何でも試して見るものだよ」

富士野はドアを開くと躊躇なく草原への第一歩を踏み出した。

動機付け

動機付けは重要だ。人物の動の大部分を決定付け、物語の運びよ
うを定めてしまう。それに、動機に共感できなかった場合、人物の
好感は著しくそがれる。それが主人公であったときなどは作品自体
が嫌悪される可能性もでてくるわけだ。

一口に動機といっても、いろいろなものがある。生存本能であつ
たり、物欲であつたり、生理的欲求であつたり。

個人的に文句の付けようがないのが、子を守るうとする母親。こ
れを出されたらぐうのねもでない。愛する子供のためならどんな行
動も許される。序章で親子の絆を丁寧に描いていたら、最後までな
にやってもOKだ。

さて、いきなり出現したファンタジー世界に迷い込んだ青年の行
動の規範となる動機とは、いったい何なのだろうか。

「どうしよっか、これから」富士野はあたりを見回しながら、俺に
尋ねる。

目の前には草原、背には森が広がっている。俺たちのでてきた扉
は、不自然にも木のうろに通じていた。端から見るとただの老木な
のだが、うろのなかをのぞくと、ドアノブがついている。試しにあ
けてみると、見慣れた喫茶店に通じていた。どうやら自由に行き来
できるしよらしい。「考えなしに引つ張り込んだのか。平穩なる
日常から、何の強制もなしに怪異へ身を投じるなら、それ相応の動
機があるんだらうな」

「人助けだよ。店長の救出にさ」何かを見つけたのか、富士野は突
然歩き出した。

俺はため息をつきながらも、後に続く。「たかだか、一ヶ月働い
ただけのバイト先の店長のためにしては、リスクが大き気がするん
だが。喫茶店から出ることを強要されたわけでもないのに。わざわざ

ざこんな所に来るのはおかしいだろ。何が起こるかもわからないし、何が得られるのかもわからないだろ」

「たしかに動機不十分という意見も最もだ。喫茶店にとどまっていたほうが、安全だったろうね。身の危険への対応が、生物的には一番の行動原則になるだろう。でも人間はそれだけのために動くとは限らないよ」富士野は屈んで地面を見つめる。

「じゃあ、なんのためにここに入った？いや出たになるのか？もう分けがわからん」

富士野の目線の先には、何か車輪のようなものが通ったのか轍ができていた。

「かなり共感を呼ぶ動機だと思うよ。つまり、好奇心さ」富士野は趣味の悪い笑い方で草原の先を指さした。「取り敢えず、街に行こうか」

ヒロイン

ヒロインは魅力的な分に越したことはない。人を惹きつける魅力があれば、それだけで物語に没入できるものだ。

反面、魅力の無いヒロインが主軸に据えられていた場合、散々たる結果が想像される。魔女に捉えられた姫君を助けようとする気高き騎士。勇敢な彼も、姫が二股かける様な女と知れば、ノブレス・オブリージがあるとも膝を折るに易い。

たとえそれでも助けよと奮起したとしても、今度は読み手の心が離れてしまう。どうしてこんな女を助けようとしているのか、騎士がわの人間性をも疑ってしまうやもしれない。

ともかく、作中人物にとっても、そして読み手にとっても魅力的なヒロインがいたほうが、よりより作品足りうるのではなかるうか。

草原で見つけた車輪の後を追って、人気の有りそうなところを目指す。富士野は意気揚々としていて、歩調も軽そうである。じつに気に食わない。

草原はなだらかな丘になっていて、遠くまで見渡すことができないう。取り敢えず丘を登りきれば景色も開けるだろうと、二人で歩き続けている。

「くそ、なんだってこんなことに」普段体を動かすことといえば、学校の体育の授業くらいだ。歩くのが得意というわけでもない。さすがにうんざりしてきた。

「弱音を吐かない」富士野は瘦身のくせして、汗ひとつ書いていない。「そんなんじゃ、うら若き姫君は助けられないよ」

「だれがうら若き姫君だよ」店長の容姿を思い出す。

店長は一言で言って野暮りたい人物である。いつも髪はボサボサ

で、ダスキンの新製品みたいな状態だ。その上前髪を長くしているから、顔がよく見えない。かろうじて黒ぶちメガネの下フレームが見えるか見えないか、双眸を拝んだことは、バイト生活を通して一度もなかった。

「たしかにうら若きと形容するほどでないにしても、それなりに若いと思うよ。ユタカさんまだ二五歳だし」富士野は店長といとこらしく、バイトを始める前から顔見知りらしかった。

「いや、歳の話をしてるんじゃないだよ。もっとほら、重要な所があるだろ、性別とか」店長を姫君などと例えるのは無理のある話だ。先の細い体つきとはいえ、長身のため女には見えそうもない。以前身長を尋ねたら一七八センチだと言っていたが、実際はもっとありそうだ。

「性別？なるほど。これはどうにも思いよらなかったね」富士野は例の趣味の悪い笑顔になった。「おっと、期待通り、街が見えてきたね」

ムダ話をして歩いていたら。いつの間にか丘を登りきっていた。小高い位置から見下ろすと、幾つかの建物が見える。遠目に見てもそこそこ大きな街なのがあった。

「立原くん、君に一ついいことを教えてあげよう」富士野は俺に向き直り、一層趣味の悪そうな顔になる。「店長は女性だ」

世界観

世界観とは元来、哲学术語である。世界をどのように捉えているか、どのように見ているか、個人個人の世界の観方のことを指している。

神はいるのか、世には幸福と不幸どちらが溢れているのか、コップには水が半分しかないのか、半分もあるのか。

昨今、世界観というと、フィクション作品の舞台設定を指すことが多い。

宇宙人、未来人、超能力者が居るのか否か。もしいたとして、社会はどう形成されるのか、一般人は認知していないとか、宇宙人保護局が設置されているとか。主軸となる設定に周辺環境がどのようなについてくるかを考察するのは実に愉しいものである。

街の中は活気にあふれていた。草原の只中にある割に、人の往来が多い街のようだ。塀に囲まれた街は商業都市なのか、荷を載せた荷車がひっきりなしに走っており、大通りには露店がところ狭しと並んでいた。

そして、様々な人が行き交っている。というか様々すぎる。

「すごいね。獣人だよ、初めて見た」富士野は目を輝かせてはしゃいでいた。富士野は普段は見せないはしゃぎようで、町中を観察していた。

「獣人と一言にいつてもいろいろな種類がいるみたいだね」猫かと思われるめの大きな種類や、口の突き出た犬のよう者、肌の堅そうな爬虫類のような者まで様々である。「どうやら、いわゆる人間

僕達のようなヒトの方が少ないみたいだね」

市場には様々なヒトがいるが、俺たちと同じような容姿の人間はちらほらと見えるくらいだ。この世界のありようなのか、この町の気風なのかはわからないところだが、どうやら俺たちはマイノリテ

イに属するようだ。

「さて、これからどうするか、店長を探して、聞き込みでもするのか」人間が少ないといっても、周囲の獣人と気軽に会話しているところを見ると、どうやら人種を特別視している感じはしなかった。

「そうだね、とりあえず人の集まるところはどこか。警察のような機関があるかどうか訊いてみようか」富士野はそういつて、ツカツカと歩いていつてしまった。

いきなりで呼び止めることもできない俺はその場に突っ立っているしかなかった。富士野はおとなしいように見えて、自分の興味を引く事柄に関しては尋常でない行動力を発揮させるようだ。

しばらくして、富士野が戻ってくる。ほがらかな表情を見ると、どうやら成果があったようだ。

「いや朗報だよ立原くん。店長の情報が手に入ったよ」

「なに本当か、さつさと捕まえて店に戻ろうぜ」

「やっぱり長身のモップ頭は目立つらしくてね。ほら向こうに見える酒場で見かけたヒトがいるらしいよ」

「よし、早速いつてみよう」二人で、酒場の方へ歩を進める。

「それにしてもよかったよ。日本語が通じるんだからね」
「いわれてみると不思議な話である。どう考えても日本の風土とはうってかわったこの世界で、現代日本語で会話ができるも野なのだろうか。」

「どうも会話に耳を傾けるとどうやら日本語で話している三田だったからね。試しに話しかけると、すんなり通じたよ。なんか吹き替え版の映画をみているみたいで不思議な感覚だったな」

「どうやら、この世界のこう用語は日本語のようである。異世界に迷い込んで、言語の心配をしなくていいのはありがたいことだが、どうにも世界観が把握できない。」

「そうこうしているうちに、酒場の前にたどり着く。西部劇でみるようなスイングドアをくぐり、中にはいると、いかにも酒場の男たちといった風貌の男たちが、一斉に視線を向けてきた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3335y/>

アンタイトルド・ライト・パルプ

2011年12月22日23時49分発行